

学びたい

公立夜間中学を求めて



—上—

水曜夜、札幌市教育文化会館の会議室が、学びやに変わる。自主夜間中学「札幌遠友塾」だ。戦時中の混乱や病氣などで満足に教育を受けられなかった人に学習の場を与えて十七年。これまで、二百五十三人が巣立った。ただ、私塾としての運営は岐路を迎えた。今春にはスタッフが道や札幌市に公立夜間中学の開設を求めたが、色よい返事は得られていない。「学びたい」。強い意欲が満ちる教室を訪ねた。

十二月初旬。生徒が原稿 伝いしたり、建設現場で用紙に一心不乱に向かっていたり。中学くらい出たかいた。自分の人生を振り返ったなあ。同市西区の太る作文。鉛筆で二文字一文 田繁雄さん(七〇)は遠友塾に字、マスを埋める。文字 通って七年目になる。十歳のほとんどはひらがなだ。の時、終戦を迎えた。敗戦「小学校を出てからずっと働いてきたよ。農家の手裕はなかった。

意欲に応え

名前の「繁」が今も漢字で書けない。「三つの漢字が組み合わさって難しい」。還暦を過ぎて始めた勉強。一度覚えても忘れてしまうことがある。それでも、「親が付けてくれた名前くらい書けないとね」。新しい字を覚える喜びをかみしめ、机に向かう。

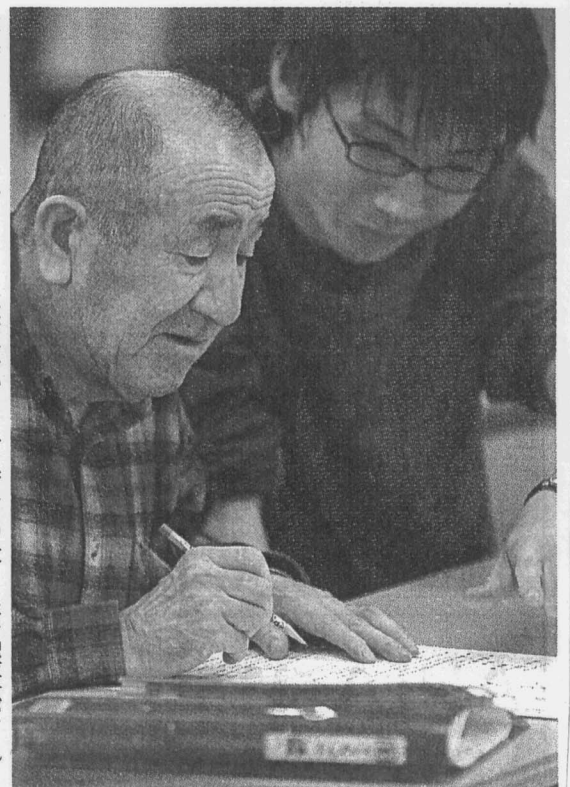
遠友塾は、札幌の会社員工藤慶一さん(五五)らが一九九〇年四月に設立した。授業は週一回約二時間。国語、数学、英語、社会の四教科を学ぶ。一三年生と「じっくり」の四クラスがあり、中学一年程度の学力習得が目標だ。生徒は現在八十五人。十代から八十代まで、

支える私塾運営は限界

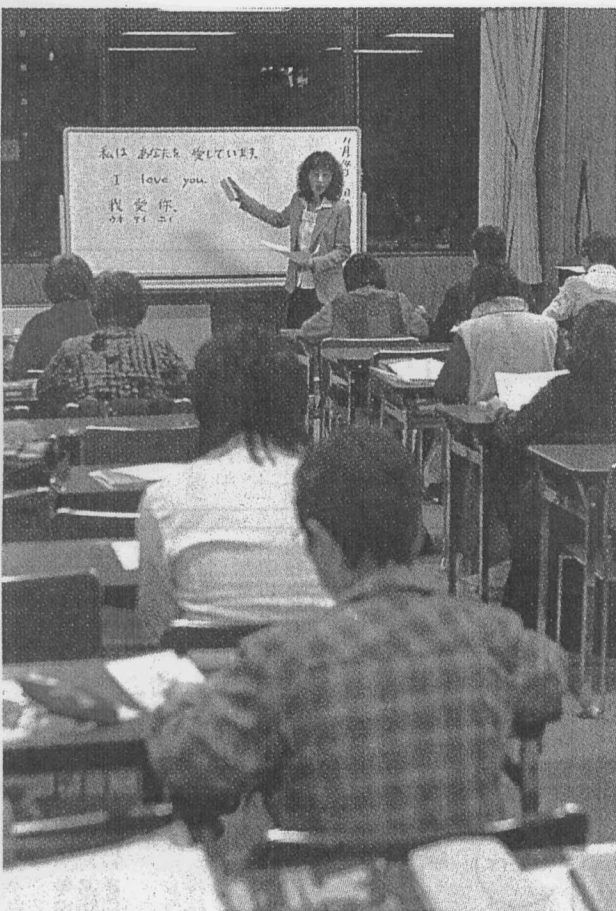
職業もまちまちだ。

山川允子さん(六八)＝同市厚別区＝は三年生。農家だった実家の手伝いに追われ、ほとんど学校に行けな

徒が支払う月千五百円の受えは「需要がどれくらいあるのか、まだ分からない」(市教委)。行政の重い腰はなかなか上がらない。二〇〇〇年の国勢調査を



スタッフとマンツーマンで、ひらがなを練習する太田さん



長机を使って、国語の授業を受ける3年生の生徒たち

かった。中学を出てすぐ缶詰工場に就職。その後もホテル従業員や清掃員として働きつめて、今も雑居ビルで清掃の仕事をする。病院や銀行の窓口で字が読めず困ることがあった。そんな時、遠友塾を知り入学した。「今は漢字だけでなく、英語の看板も分かるわ」と笑う。

学ぶ喜びを実感する生徒の表情は明るい。だが、その活動を支える態勢はあまりにも脆弱だ。運営は生りだ。会場の同会館の使用料は年間五十五万円。札幌市が半額を免除するが、運営には重くのしかかる。今年五月、工藤さんらは「北海道に夜間中学をつくる会」を結成した。道内初の公立夜間中学設立を目指す運動のためだ。遠友塾では生徒が増え、さらに、心理面のケアが必要な不登校の経験者も含まれるようになった。ボランティアだけの運営は限界にきていた。道と札幌市に要望書を出し、道議会、市議会に請願や陳情もした。しかし、答

(この連載は本庄彩芳が担当し、3回連載します)

学びたい

公立夜間中学を求めて

—中—

「わたしの夢は、学校の週五日で二十時間教える。もんをくぐることだ」。札幌遠友塾に通って七年になる伊藤フサ子さんは、札幌市厚別区では今月上旬「自分の人生について」をテーマにした作文を書き始めた。

生後すぐポリオにかかり、両手足に障害がある。幼いころ、家は貧しかった。治療費もかさみ、学校に通えなかった。自宅の窓からは同じ年ごろの子どもが登下校する姿が見えた。うらやましかった。

伊藤さんは、「毎日、学校に通うのが夢。死ぬまでに一つでも多くのことを知りたいから」と言う。遠友塾で週一回二時間の授業を受けるが、幼少期の空白を埋めるには、その時間はあまりに少ない。

全国に三十五校ある公立夜間中学の多くは、国語、数学、理科、社会、英語など九教科を、一日四時間、

週五日で二十時間教える。だが「自主」夜間中学の遠友塾で学べるのは国、数、社、英の四教科。授業時間にいたっては十分の一にすぎない。公立との差は歴然だ。

「ちゃんと『学校』で勉強したいんです」と一年生の富田真寿さん(三)も「白石区」も言う。中学時代、いじめにあった。制服を破られ、教科書を隠された。三年生から不登校になった。高校は通信制に通ったが、中学での勉強不足でついていけず、一年でやめた。

でも、勉強し、仲間と集える「教室」への未練は消えない。「学校はやっぱり楽しいところ」。そう思うからだ。

学ぶことへの切実な思い。それは遠友塾に通う生徒の多くに共通する。しかし、札幌で公立夜間中学を設立するため、乗り越えなければならない壁は、まだ

行政の「壁」

厚く、高い。



スタッフがパソコンで打ち込んだ原案を前に、作文に取り組む伊藤さん(右奥)

切実な訴えに重い腰

◆ ◆
遠友塾代表の工藤慶一さん(五)らが結成した「北海道に夜間中学をつくる会」は今年五月、札幌市教委に設立を求める要望書を提出した。

それから半年余り。市教委は「他都市の現状を調査を進めている」と繰り返す

ばかりだ。大関好明教育推進課長は「夜間中学の生徒は戦争で学校に行けなかった人が中心で、みな高齢。公立化しても、どれだけ生徒が集まるか」と、後ろ向きな姿勢を崩さない。

「つくる会」が六月に要望書を手渡した道教委も同じ。道教委は四月、公立夜間中学の設置要望を問う全道調査を行った。だが、

調査の対象は百八十の市町村教委だけだった。「要望なし」の結果に、「求められていないと判断しています」(生涯学習部)と、にべもない。

「役所に行っても字が書けず、『手が震えて書けない』とうそをついたことがあります」。道教委への陳情では、桑山玉枝さん(七)も「悔しくて仕方ない」。その声はまだ、行政に響かない。

中央区Ⅱが、居並ぶ役人

学びたい



—下—

公立夜間中学を求めて

東京都世田谷区の三宿^{みしやく}中。日中、教室やクラウンに子供たちの声が弾む学校は、日が暮れるころ、大人たちが通う夜間中学となる。

十二月上旬。夜間学級三年の田代真也さん(三)は授業開始の二時間も前から教室にいた。黒板、学習机、壁に張られた世界地図…。会議室を間借りする札幌遠友塾と違い、「本物の教室」だ。田代さんは教科書を開き、時間を惜しむように、予習、復習を始めた。

小学三年の時、不登校になった。ほとんど自宅にひきこもり、誰にも勉強を教わることがなかった。だが、二十歳を迎え、簡単な漢字も書けないことに焦りを感じた。

「今までの遅れを取り戻したい」。一昨年春、夜間中学に入学した。以来、無遅刻、無欠席。今はコンピュータ関係の仕事に就くのが夢。来年二月には都立高校の入試に臨む。

三宿中の夜間学級には十

クラスがあり、九十七人が通う。このうち、四クラスは主に中国残留孤児の帰国者やその子供たちが通う。残る六クラスの生徒は戦時中の混乱や不登校で、義務教育を受ける機会を逃した人たちだ。教室の光景こそ違いうが、彼らの学ぶ姿は、遠友塾の生徒と少しも変わらない。

公立夜間中学は戦後、中国や朝鮮半島から引き揚げた人たちの学習機会を確保するため、関東や関西で次々と設立された。一九五四年の八十七校をピークに、統廃合で一時期は二十校に減ったが、七〇年代から再び増え、現在は八都府県に三十五校ある。

需要衰えず



三宿中夜間学級の社会の授業。教科書、プリントを手に、教師の話に真剣に耳を傾ける生徒たち

設立への機運、全国で

「夜間中学は世相を映す鏡。時代の流れからこぼれ落ちてしまった人々の受け皿なんです」。三宿中で日本語を教える関本保孝さん(五)は言う。入学当初、ひらがなも満足に書けなかった人が、卒業するころにはしっかり漢字を書く。そんな生徒の成長を二十九年間、見守り続けてきた。高校進学率97・7%。文部科学省が行った二〇〇六年度学校基本調査の結果、数字からは「中学に通えなかった人がいた」時代は過去のものに映る。だが、は過激なものに映る。だが、を充実させても、関本さん

の言う「時代からこぼれ落ちる人」はいる。

三宿中を管轄する世田谷区教委の菅井芳彦学務課長は「夜間学級は、今後も必要とされ続ける」と指摘する。事実、全国では設立の機運が高まりつつある。千葉市では十月末、市教委が公立夜間中学設置検討委員会を発足させた。北九州市では、公立ではないが、〇五年度から市が民間に年百万円の補助金を出し、週五日制の「夜間学級」が実現した。

道内で公立夜間中学開設を目指す遠友塾代表の工藤慶一さん(五)は言う。「公立化への道は平坦ではないが、北海道でできない理由はない」

◆ ◆ ◆
遠友塾の生徒伊藤フサ子さん(六)は「自分の人生について」の作文をこう締めくくった。

「ずっとしたかったんきょうができて、字がかけようになつて、じぶんのことがはなせるようになって、いまが生きてきた中でいちばんしあわせだ」

作文用紙の小さな升目に、学ぶ喜びがあふれていた。